

令和5年度 第2回豊田市文化芸術振興委員会 会議録

○日時

令和5年9月21日（木） 午後2時～午後3時30分

○場所

教育委員会会議室（豊田市役所東庁舎6階）

○出席者

（委員）※敬称略

- ・高北幸矢（委員長）、高橋秀治（副委員長）、石黒秀和、伊丹靖夫、磯村美沙希、鈴木利恵、中佳子

（事務局）

- ・生涯活躍部 | 加藤市民活躍室長
- ・文化振興課 | 相田課長、太田副課長、志村主査

○傍聴者

なし

○要旨

加藤市民活躍室長あいさつ

第1回の会議を書面開催とさせていただいた。多くのご意見をいただき感謝する。今回は、市の総合計画において重点的な事業と位置付けている「市民によるアートプロジェクト推進事業」の今後の方向性についてと、現在、学校が担っている部活動を段階的に地域に移行する「休日部活動の地域移行」について説明させていただく。いずれの議題も委員の皆様から忌憚ない意見を伺いたい。

議題1

市民によるアートプロジェクト推進事業の今後の方向性（案）について【資料1】

- ・別紙1にある、文化活動者を初級・中級・上級に分ける表現がどうか。
- ・アンケート結果をみると、とよたデカスプロジェクト（以下、デカス）は、自分の表現を外に発信したい人が応募している。自分の表現を外に発表することと、アートプロジェクトをマネジメントできることは異なるので、マネジメントできることに特化した内容があってもよいのではないか。
- ・市民アートプロジェクトの中で、デカスの人材（マネジメントできる人材）を育てるプラン・活動があってもよいと思う。
- ・アートに関わる人材、アートプロジェクトを企画できる人材を育てるには我慢がいるし、すぐには成果が出ない。高い目標をかかげて、種を撒いて、次世代に渡す。すぐには解決できない課題があってもいいのではないか。

- ・初級・中級・上級は自己評価なのか外部評価か。
- ・初級・中級という表現は、確かに個人評価（個人のレベル）に聞こえるが、ここで表したいのは個人の趣味なのか、社会に開いていっているかという段階だと思う。この表現は、自己評価という誤解を受けるため、無くしてもよいかと思う。その代わりに、例えば、ステップ1・ステップ2にするなど。
- ・上級者になるにつれて（右にいくに従って）、より社会的な活動になるイメージだと思う。ただし、そうならなくてはいけないということではない。

事務局

- ・生きがいを持って、生涯活動できる人たちを育てたい。増やしていきたい。
- ・プロを育てたいわけではない。
- ・アートプロジェクトを実施する側と、受ける側の印象は違う。
- ・自分は鑑賞者であると思う。アートプロジェクトを企画・実施したが、初級から上級のどこにも当てはまらないと感じるし、趣味として行った。あくまで鑑賞者としての延長上に、自分の活動がある。活動をしている人すべてが、普及者になるということもない。
- ・活動者の年齢層のデータなどはあるか。どういった年代が活動しているのかも知りたい。

事務局

- ・初級・中級などを削る。
- ・プロも無くし、普及者活動を生きがい等に並列させてはどうか。
- ・初心者・経験者もいないかと思う。実演者がプロデューサーになるかと言うと、プロデューサーから入る人もいる。別紙1にある流れがスタンダードではあるかもしれないが、この流れに乗らない人もいる。
- ・とは言え、市の事業としてやっていく以上は、どれだけ社会や多くの人に影響を与えていくかということは求めたいし、そういう事業に育ててほしい。そのため別紙1にある流れで進めていく必要はあると思う。ただし、個人・プロの優劣などは、誤解を受けると思うので削除した方がよい。
- ・みる・おどる・おどらせるということが大切だと思い活動している。こういった表現を表せる適切な言葉があるといいが。
- ・鑑賞者が抜けていると感じる。自分は一鑑賞者と思っている。みるは文化活動に入らないのか。
- ・市民全体を考えたとき、鑑賞者が多いことも大切。鑑賞者が多いと、表現者やマネジメントできる人材も増える。面白いことをやると、人がたくさん集まる街であることも大事ではないか。熱狂的なスポーツや文化など、観るプロのような人もいる。スポーツや文化活動ができなくても、鑑賞も生きがいではないか。
- ・観る人も文化活動者に含めるかどうか。

- ・市全体の文化芸術振興策としては、観る人が増えることが大事だと思う。
- ・文化活動している人の中に、鑑賞者が入っていないので、この図の中に入れてもよいのではないか。
- ・子ども時代に観る楽しみを体験させると、将来も文化芸術を楽しめると思う。
- ・人づくりという視点から考えると、例えば文化振興財団の奨励賞を受賞した人など地域に活動者はたくさんいるので、市民によるアートプロジェクト推進事業の中で、活動者の横の繋がりを作っていくことができるとうい。
- ・まちなか芸術祭の記録集で、まちなか芸術祭に関わった人が、地域にアートが浸透してきているという実感がある。と発言している。市民アートプロジェクトに関わった人にはそういった実感があるということは、目に見えた成果ではないが、先ほど意見があったように、文化芸術の種は撒かれていると思う。
- ・学校現場とつながれると、子どもたちのみる・体験する機会が増えると思う。
- ・子どもたちに小学校の時から観る楽しみを知ってほしいし、そういう子どもたちが育ってほしい。
- ・美術館は、公共施設見学のひとつに入っている。
- ・学校から外に、現場に出向くことはなかなか難しいので、出前事業という形で文化芸術の楽しみ方を知っている人に学校に来てもらい、子どもたちに文化・芸術の楽しみ方を教えてもらえるとよい。

事務局

- ・WE LOVEとよた教育プログラムというものがあり、豊田市の教育資源を活かした授業プログラムを学校の先生と行政等と一緒に考えており、順次増えている。文化振興課も今年度、先生と一緒にプログラムを作っている。
- ・アートを体験できるプログラムは、少ない印象。
- ・イギリスの事例では、アーティスト派遣事業を実施した学校では、アーティストから授業を受けた子どもたちの学力が向上したというデータがある。異なった価値観に触れることで、子どもたちの興味関心が広がる。
- ・どんなアーティストも、小学校へ行きたがっている。文化芸術活動を、子どもたちに直接伝えることが大事だと思っているし、喜びだと感じている。
- ・市民によるアートプロジェクトは、評価のとおり当初の目的に対して成果が出ていることがよく分かったし、基本的には継続していくということで、今日は報告があったと思う。この7年間で、アートプロジェクトをプロデュースできる人材が市内で育ってきていると思うので、育ってきた人材が活躍できるような支援をしていくことで次の段階に繋げていってほしい。
- ・デカスは、資料に人材育成と魅力発信の2つのコース案が示されているが、審査員をやらせてもらって、確かに2つのコースを分けて考えていった方がよいと感じた。初心者にはちょっとハードルが高いと感じた。初心者を応援したいが、デカスの趣旨を考えると、採択できない場合もあった。これからアートプロジェクトを始めたいという人たちへの門戸が広がる仕組みがよいと思う。
- ・市民アートプロジェクトでは、著名アーティストの招聘は安易かと思う一方で、

確かに外からの風を入れることも必要かと思う。リキャスティングクラブの時は、ナデガタインスタントパーティーが上手く参加者を巻き込んで、面白いプロジェクトを作り上げていた。今後またアーティストがプロジェクトに関わる際は、人材育成できるアーティストの視点で選んだ方がよいと思う。

- ・豊田市の南部に住んでいるが、デカスや市民アートプロジェクトを知っている市民が少ない。開催地がまちなかに限られているからではないか。例えば、各地区の交流館を年度毎に巡回するなど、まちなかにこだわらず、様々な地域で開催することも検討してもよいのではないか。

議題 2

休日部活動の地域移行について【資料 2】

- ・4月から地域指導者を吹奏楽部で行っている。
- ・アンケート「部活動の地域移行における心配事」に勝利至上主義への傾倒とあるが、確かに吹奏楽部では金賞などがあるが、文化系の部活についてはあまり当てはまらないと感じる。
- ・休日に地域行事に参加したが、難しい点がいくつかあった。例えば、発表会場までの楽器の運搬を誰が行うか、楽器が古い場合のメンテナンスや購入など予算の問題、個人情報保護の関係で生徒の名簿がもらえないなど。
- ・家庭の状況や地域学校共働本部の生の声をもっと知りたい。
- ・令和8年度に向けて、豊田市ではこれから独自のモデルを考えるということか。
- ・学校の部活で行うことが無理になったので、地域に受け皿を作れ。というように感じる。自分の活動に置き換えると、自分の活動に子どもたちを受け入れられる範囲で受け入れる。という事になると思う。そのくらいしか考えられない。
- ・豊田市は交流館があるので、交流館を軸に新たな仕組みを考えられるかとも思うが、今でも地域ごとに部活動の選択肢等に格差があるので、これを豊田市内一律でとなると、とても難しいのではないか。
- ・子どもたちの選択肢が増えて、選べるようになるのはよいことだと思う。
- ・指導者を教員以外の人で確保するという舵の切り方は分かりやすく、そうであれば部活というイメージを継続することができるが、新たな仕組みとなると、もう部活ではないと思う。
- ・自分の住んでいる地域では、授業時間でクラブ活動を行い、部活は自主活動だった。保護者が指導者に謝礼を払っていた。学校の時間外は、鍵も試合への送迎等も保護者がやっており、負担が多かった。負担をできる親の子どもしか参加できず、親ができないと子どもが我慢をしないといけなくなる。難しい問題。
- ・説明を聞くと、部活というより習い事という印象を受けた。
- ・部活で育った世代は、部活はよかったという印象がある。それが教員のボランティアで成り立っていたことが問題だったと思う。
- ・大会が強いところは、その部活動が一生懸命になる。それが学校の名誉にもなる。
- ・部活という限れた選択肢の中だからこそ、新しいことに出会うきっかけにもなる。吹奏楽で出会った楽器から、プロの演奏家になった人もいる。

- ・豊田市としては、今ある文化団体やスポーツ団体に受け皿になってもらうことが大きな方向性か。

事務局

- ・それを含めて、今後決めていきたいと思っている。
- ・極端なことを言えば、今ある部活動をやめます。その後、自然発生的に受け皿が生まれるということもありかもしれないが、今まで部活動が学校の責任下にあつて、保護者も子どもたちも安心して活動できる環境があったので、そういった環境を別の受け皿を作って担保することが必要ではないかと思う。
- ・子どもたちが置き去りにならないように検討しないといけない。
- ・地域が主体的にと言いつつ、市からの号令を待っているというのが日本的だと思う。指導者確保など、予算があればできると思うが。

事務局

- ・地域クラブ活動という名称を国では使っている。基本的には、受益者負担が原則だけど、成り立たせるためには市で支援することも必要かと考えられる。
- ・部活の内容によって格差が出そう。地域クラブ活動が、理想は中学校区ごとにあるのがよいと思うが、現実には難しいと思う。

事務局

- ・近隣の中学校と部活動を統合することで、部活動を維持することも考えられる。移動の負担は出ると思うが。
- ・演劇では、子ども創造劇場をやっているのだから、それが受け皿になるかと思うが。他の文化やスポーツでは、それぞれ状況が違うと思う。
- ・この委員会に議題としてあがる理由は、文化として考える。という事でよいか。

事務局

- ・文化活動者、文化という側面からのご意見を伺いたい。
- ・今アンケートで、交流館等で活動している市内のスポーツ・文化団体が、どのくらい子どもたちを受け入れることが可能かを調査している。
- ・活動場所の問題もあると思う。
- ・子どもたちへのアンケート結果から、一見「絵を描く・工作をする」という活動ニーズが高いように感じるが、この絵とは漫画イラストやゲームで見たものを描きたいということ。美術展への応募であっても、若い世代はそういった絵がほとんど。
- ・単純に子どもたちのニーズに沿うことが良しなのか。今の子どもたちは美術・音楽に出会う機会が少ない。部活で出会い・知ることで、好きになることもあると

思う。

- ・吹奏楽の活動は、校舎に入らないといけないから難しい。楽器の保管場所の問題がある。セキュリティの設定を今の状況から変えることが必要。

事務局

- ・県が人材バンクを作ろうとしている。どのくらい教えたい人材がいるかを把握する必要がある。
- ・以前に豊田市文化振興財団が人材バンクを作ろうと試みたがあまりうまくいかなかった。予算の問題もあるが、人材バンクを作り担ってもらうのは難しいと感じる。
- ・例えば、デカスみたいに、地域から指導者や活動を募ってはどうか。

事務局：次回開催は令和6年2月頃を予定。

以上